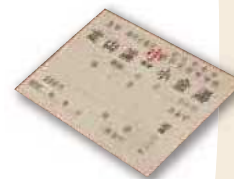


地域のあゆみが見えてくる。

札幌の 郷土資料館



札幌の郷土資料館

制作：札幌市市民文化局文化部文化財課
〒060-0001 札幌市中央区北1条西2丁目 札幌時計台ビル10階
TEL 011-211-2312 FAX 011-218-5157

令和7年4月発行



さっぽろ市
02-D05-25-273
R7-2-195

SAPPORO

地域のあゆみを学ぶと、
もっと今の場所が好きになる。

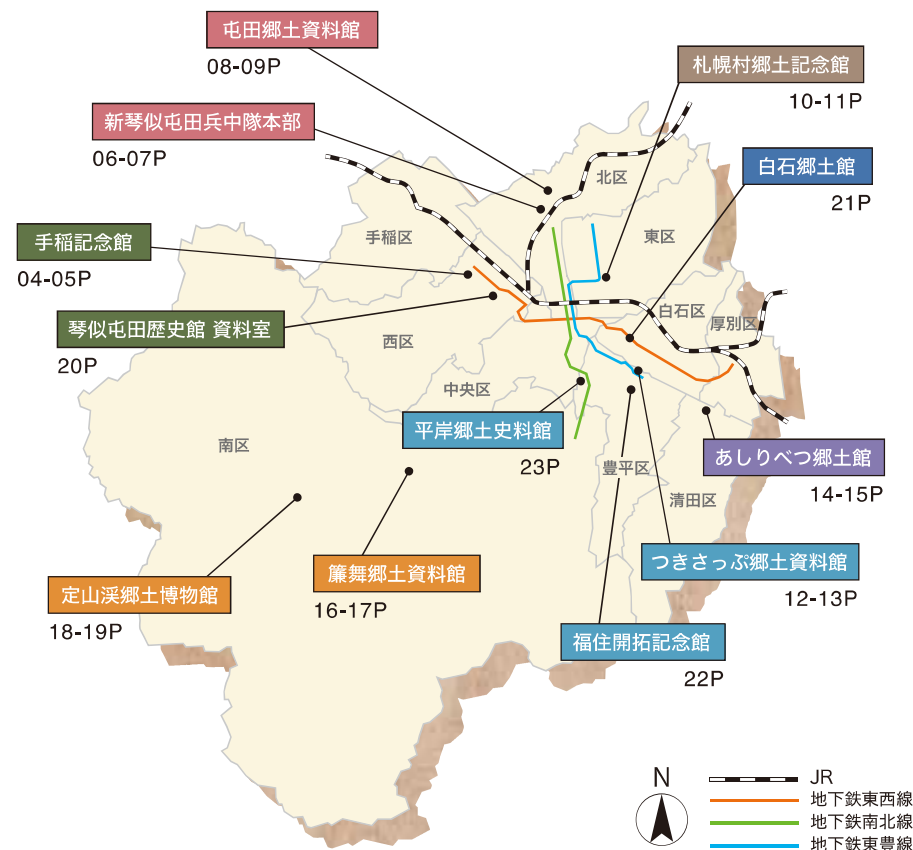
郷土資料館に 行ってみませんか。

アイヌ民族が暮らしてきた北海道。明治に入り開拓使が設置され、以降、本州から北海道への移住が本格化します。
地域によって、その歴史はさまざまです。
市内の郷土資料館では、各地域で守り伝えられてきた貴重な資料を展示・解説し、そのあゆみを現代に生きる私達に教えてくれます。
そしてこれらの資料館の多くは、
地域の方々の熱い想いがあってこそ、成り立っています。

まずはあなたの地元の資料館へ。
それから興味のある地域の資料館へ。
郷土資料館を訪ねてみると、
まちの見え方もずいぶん変わるかもしれません。

札幌市市民文化局文化部文化財課

札幌市内郷土資料館 MAP



INDEX

手稲記念館(西区).....	04	簾舞郷土資料館(南区).....	16
新琴似屯田兵中隊本部(北区).....	06	定山溪郷土博物館(南区).....	18
屯田郷土資料館(北区).....	08	琴似屯田歴史館 資料室(西区).....	20
札幌村郷土記念館(東区).....	10	白石郷土館(白石区).....	21
つきさぶ郷土資料館(豊平区).....	12	福住開拓記念館(豊平区).....	22
あしりべつ郷土館(清田区).....	14	平岸郷土史料館(豊平区).....	23

※当冊子では、土地または建物が市所有の郷土資料館のみ掲載しています。
※当冊子の内容は、各郷土資料館への取材や各資料館の展示物などを基に作成しています。



すべてが人馬の力でまかなわれていた当時の苦勞に想いを馳せたい。

知られざる手稲の意外な一面が見えてくる

西区

ていねきねんかん

手稲記念館

教育にも力を入れた片倉家臣団

昭和42年(1967)に手稲町(現在の手稲区と西区の一部)が札幌市と合併したことを記念し、手稲のあゆみを伝える資料館として2年後に開館した。

同館では手稲の昔の様子や、手稲遺跡からの出土品や古文書、生活用具などの歴史資料が多数展示されている。

明治5年(1872)、上手稲(当時は発寒ベッカウス=現在の西区西町および宮の沢付近)に、旧仙台藩・白石城の片倉小十郎邦憲の家臣団47戸(241人)が移住した。この時、共に片倉家から札幌を目指したのは

600人余であったが、そのうちの380人は白石村へ、241人は手稲村へと、開拓使の指令に従って二手に分かれて定住した(21ページ「白石郷土館」本文も参照)。上手稲は石が多く痩せている上、用水確保も困難という悪条件の土地であったが、血のにじむような努力で開墾に挑み、養蚕や果樹栽培も盛んに行われたという。

片倉家臣団は子弟教育にも力を入れ、移住とはほぼ同時期に白石には「善俗堂」、上手稲には「時習館」という教育所をそれぞれ設立。視察に訪れた開拓使の松本十郎判官がいたく感心し、帯刀の武士が鍬で開墾をしている姿を描いた掛け軸を贈って彼らを

コレも見どころ

手稲の消防のあゆみを伝える

豊富な展示資料の中で目を引くのが、昭和2年(1927)に軽川消防組(現在の手稲消防団)が購入したという「ガソリンポンプ車」である。それまでの手押しポンプに比べ、20馬力のガソリンエンジンで水をくみ上げて放水する力は段違いに強力で、消防活動ではいつも大活躍していたという。昭和30年代頃の消防士の装備も展示されており、現代との違いに驚かされる。



激励した。同記念館では時習館に贈られた掛け軸が展示され、塾頭であった三木勉の功績を称えている。

また、手稲のあゆみには意外な側面もある。展示されている鉱石標本は、かつて金銀銅などが採れる鉱山として活気に溢れていた手稲山から採掘されたものだ。

明治20年代半ばから試掘が繰り返され、昭和から本格的に鉱山事業が開始。昭和10年(1935)には三菱鉱業が手稲鉱山の経営に参入し、最盛期には月産5万トンの金銀

銅の原鉱石を産出した。東洋一の金山と呼ばれた鴻之舞^{こうのまい}鉱山に次ぐ産金量を誇った時期もあったが、次第に減少し、昭和46年(1971)に閉山した。



手稲鉱山から産出された金、銀、銅、鉄などの金属を含んだ鉱石の数々。



開拓使判官が「時習館」の塾生に贈った掛け軸。白石の「善俗堂」へ贈られたものと対になっている。

住 所：西区西町南21丁目3-10
電 話：011-661-1017
休 館 日：火・木・日曜、祝日、年末年始
観 覧 時 間：9:00~17:00
ア ク セ ス：地下鉄東西線「宮の沢」駅
5番出口から約560m
資料収蔵数：約1,130点
開 館 年：昭和44年(1969)



明治19年(1886)から変わらぬ姿で、この地域を見守ってきた。

有形文化財の建物が物語る屯田兵村の風景

北区

しんことにとんでんへいちゅうたいほんぶ

新琴似屯田兵中隊本部

九州から厳寒の地へ

明治20年(1887)に札幌で3番目に屯田兵が移住したのは、ここ新琴似の地である。当初、屯田兵の募集は東北地方の士族を採用していたが、やがて全国に地域を広げていく。新琴似屯田兵の募集はおもに九州・中国地方で行われ、移住者の85%が福岡・熊本・佐賀・大分という九州出身者であった。明治20年に146戸、翌21年(1888)に74戸が家族を連れて移住。計220戸による新琴似屯田兵村は第一大隊第三中隊と呼ばれる軍隊となった。

その中隊を束ね、指揮する重要な任務を

果たしたのが中隊本部である。建物は明治19年(1886)に建てられた。アメリカ中西部の開拓期に流行したバルーンフレーム構造が特徴的で、開拓使や北海道庁がアメリカの住文化を積極的に取り入れていたことを表している。役割を終えてからは新琴似兵村会の共有財産として引き継がれ、のちに新琴似公会堂などに利用されてきた。昭和30年(1955)に琴似町が札幌市と合併し、昭和40年(1965)に札幌市へ寄贈された。昭和47年(1972)には創建時の姿に復元され、札幌市指定有形文化財となっている。ほぼ完全な形で当時の原形をとどめている貴重な官庁建築の遺構である。

コレも見どころ

細部までこだわって制作されたジオラマ

展示室には新琴似兵村の家族の作業風景や訓練の様子などがジオラマで再現されている。まだ白木の美しい中隊本部や、銃を構えて隊列を組む屯田兵達、兵屋の前に広がる畑を耕す家族。緑がまぶしい夏の風景だが、冬はどのような景色が広がっていたのだろうか。人形一人一人に表情があるような精緻なジオラマを、じっくりとのぞき込んで見てほしい。



現在、建物は郷土資料館として活用され、内部の見学と併せて屯田兵村での暮らしなどを学ぶことができる。玄関を入ると右手には下士官集会室、その奥に中隊長室、左手には下士官事務室と軍医室があり、資料やパネルが展示されている。三角屋根の真下には窓も備えた小屋裏があるが、階段の傾斜が急なため見学は出来ない。

新琴似兵村で各戸に与えられた土地は、なんと約4,000坪。その中にそれぞれの兵屋が建っていた。土地には番号がつけられており、全員で番号札を引く抽選で区画が割り当てられ、用地によっては開墾のしやすさに差がある場所もあったという。



執務風景が目に浮かぶ中隊長室。飾られているのは中隊長の礼装である。

厳寒の冬も農作業の経験もなかった新琴似の屯田兵。粘土質の一大低地帯に巨大な排水溝を築き、農耕地に変わった新琴似はその後大きく発展を遂げていく。



当直室や炊事室だった部屋には開墾道具、養蚕・農耕なども多数展示されている。

住 所：北区新琴似8条3丁目1-8

電 話：011-765-3048

休 館 日：12～3月冬期休館、
4～11月の月・水・金・日曜

観 覧 時 間：10:00～16:00

ア ク セ ス：JR「新琴似」駅から約500m

資料収蔵数：約240点

開 館 年：昭和49年(1974)



屯田兵屋をそのまま移築・復元。音声ボタンを押すと家族の会話が流れる。

本物の屯田兵屋で、当時の暮らしを実感

北区

とんでんきょうどしりょうかん

屯田郷土資料館

西日本からの移住者たち

現在の北区屯田は、琴似、山鼻、新琴似に次いで最後に札幌に誕生した屯田兵の移住地であり、かつては篠路兵村と呼ばれていた。

屯田地区センターの1階にあるのが、この地域の歴史を学ぶことのできる屯田郷土資料館である。昭和63年(1988)に開設され、かつての一带の様子や移住者達の航路、兵村の暮らしなどを模型やパネル、農耕具などの実物資料で紹介している。

明治22年(1889)、徳島・和歌山・山口・福岡・熊本・福井・石川といういずれも暖国の地

から集まった士族とその家族220戸(1056人)が、運送船・相模丸に乗船して瀬戸内海を出航。小樽港に上陸し、手宮から琴似駅までは列車で、そこから徒歩で篠路兵村へたどり着く。村には木造平屋の兵屋が220戸用意されており、彼らは土地のほか寝具や家具、農耕具、種子などが与えられた。移住から3年間は扶助米、塩菜料が給与されるなど手厚い補助があったが、本州式の家屋は寒さが厳しく、一家の主が兵員として訓練に駆り出される間も、開墾を担った家族の苦労は計り知れない。大火や大水害にも見舞われ、72戸まで激減した時期もあった。

屯田郷土資料館の最大の見どころは、実

コレも
見どころ

篠路兵村から日清・日露戦争への出征も

屯田兵は開墾に従事する一方で、有事の時には出兵できるように軍事訓練も受けている。日清戦争では篠路兵村からも招集されたが、東京で終戦を迎えて無事に全員が帰郷。日露戦争では兵村から多くの若者が出征し、戦死者も多数出た。資料館では出征日記や兵村の家族が戦地へ出した便り、除隊記念の品など数々の兵役にまつわる資料も展示されている。



物が移築復元された屯田兵屋である。明治22年に山口県から移住した屯田兵が暮らしていた兵屋で、その後も住居や納屋として使用され残っていた。屯田地区において現存する唯一の兵屋を永久保存しようと、資料館の開館にあたり寄贈を受けて解体、移築復元が行われたという。和式木造切妻平屋の兵屋は、屋根の桁と下見板のほかは建設当時のものをそのまま使用。土間、炉を切った板の間、8畳と4.5畳の部屋、流し台と便所という実にこじんまりとした間取りだが、唯一の暖房である炉の周りで家族が肩寄せ合って過ごしていたのだらうと想像が膨らむ。



切り株を引き抜き開墾していった開拓民の過酷な生活を、迫力ある絵のパネルや道具類が語る。

資料館2階にはたびたび石狩川の氾濫に見舞われてきた屯田の治水の歴史や、屯田兵移住の翌年から始まった学校教育、日清・日露戦争での屯田兵の出征記録などが紹介されている。



地域住民がレクリエーションなどに利用する地区センターの一角にある。

住 所：北区屯田5条6丁目3-21
屯田地区センター1F
電 話：011-772-1811
休 館 日：月曜、年末年始
観 覧 時 間：13:00～16:00
ア ク セ ス：中央バス「屯田地区センター」停留所
資料収蔵数：約1,330点
開 館 年：昭和63年(1988)



まずは記念館前で大友亀太郎の像に接見。どのような人生を歩んだのか、館内で学びたい。

大友亀太郎の功績と、札幌の玉ねぎの歴史を知る

東区

さっぽろむらきょうどきねんかん

札幌村郷土記念館

創成川として今も残る大友堀

現在の東区に位置していた「札幌村」は、慶応2年(1866)に徳川幕府の命を受けた大友亀太郎の尽力により札幌の発展に重要な役割を果たした。

昭和52年(1977)開館の札幌村郷土記念館は、大友亀太郎邸宅跡地(札幌市指定史跡)に建ち、幕末から昭和期の貴重な地域の歴史資料を収蔵・展示している。

展示の柱でもある大友亀太郎は、相模国足柄下郡西大友村(現在の神奈川県小田原市)の農家の長男として生まれ、苦学の末に二宮尊徳に師事。幕府からの命を受け、安

政5年(1858)に箱館奉行所へ渡った。木古内と鶴野(現在の七飯町)の開拓を成し遂げたのち、慶応2年(1866)に石狩の開拓を任せられる。石狩を調査して回った大友は開拓の場所を元村(旧札幌村の一部、現在の札幌市東区内)に定め、役宅を現在の記念館付近に置いた。さらに約4kmに渡る用水路「大友堀」の工事を3カ月程で完成させ、翌年に御手作場(模範農場)も造り、農民を移住させる。用水路の一部(南3条～北6条)は、後に島判官による札幌の都づくりの東西基準線になり、今も創成川として残っている。彼の偉業を伝える古文書や遺品など55点の歴史資料(札幌市指定有形文化財)は必見だ。

コレも
見どころ

「札幌黄」の生みの親、ブルックス博士の功績を刻む

令和4年10月、札幌市制施行100年と東区制施行50年を記念し、「札幌黄」の生みの親であるウィリアム・ペン・ブルックス博士の顕彰碑が記念館の前庭に建立された。除幕式には博士の曾孫がオンラインで参加し、「札幌の農業発展に曾祖父が貢献したと認めていただき本当に嬉しい」と感謝の言葉を寄せた。隣には「わが国の玉葱栽培この地にはじまる」の記念碑(昭和53年11月建立)もある。



同館のもう一つの目玉は、札幌の玉ねぎ栽培に関する歴史資料類59点(札幌市指定有形文化財)である。明治4年(1871)、開拓使がアメリカから輸入した種子を札幌官園で試作したのが、日本の玉ねぎ栽培の始まりとされている。クラーク博士の推薦で札幌農学校に招へいされた教師、ウィリアム・ペン・ブルックスは、明治10年(1877)、故郷のマサチューセッツ州原産の玉ねぎ「イエロー・グローブ・ダンパース」の種子を取り寄せて試作を行い、札幌村の農家にも種子を配布して栽培指導をした。やがて村は玉ねぎの一大産地となり、国内はもとよりロシアや東南アジアへも輸出するほどの繁栄をもたらした。



未知の西洋野菜だった玉ねぎ栽培を積極的に推進した当時の指南書(札幌市指定有形文化財)。

現在は収益性の高い品種(F1)が主流だが、ブルックスの種子をルーツとする「札幌黄」は今も地元農家に受け継がれている。開拓期の玉ねぎ栽培にまつわる歴史資料や農耕具が、試行錯誤と努力を重ねた農家の苦労や熱意を今に伝えてくれている。



札幌の玉ねぎ栽培に使用されていた農耕具を多数展示。

住 所：東区北13条東16丁目2-6
電 話：011-782-2294
休 館 日：月曜(祝日の場合は翌日も休館)、
祝日の翌日、年末年始
観 覧 時 間：10:00～16:00
ア ク セ ス：地下鉄東豊線「環状通東」駅
4番出口から約350m
資料収蔵数：約2,760点
開 館 年：昭和52年(1977)



旧陸軍北部軍司令官の公邸官舎として建設された建物。赤いレンガが特徴的だ。

軍隊の町として知られた月寒のあゆみを学ぶ

豊平区

きょうとしりょうかん

つきさっぷ郷土資料館

4年間だけの司令官官邸

資料館の建物は昭和16年(1941)に旧陸軍北部軍司令官の公邸官舎として建てられたレンガ造りの洋館。太い柱が支える正面中央の車寄せが特徴的である。戦後は占領軍に接收され、その後昭和25～58年までは北海道大学の学生寮として使用されていた。昭和60年(1985)から郷土資料館として活用され、増築した棟を合わせて約4,000点もの資料を展示・保存している。

展示室は4カ所あり、第1号展示室は開拓期がテーマだ。明治政府が整備した千歳道(現在の国道36号)沿線に岩手県から44戸

(185名)が移住したのが明治4年(1871)。その後他県からの移住者も続き、当時の造材用具や農機具、馬具などを展示している。

2階の第2展示室では、明治29年(1896)に第七師団の兵営が置かれて以来、発展していった月寒の歴史をひもといていく。明治32年(1899)から月寒に置かれた第七師団歩兵第25聯隊は、日露戦争時に二〇三高地を陥落させた主力部隊である。昭和15年(1940)には国内が東部、西部、中部、北部の4軍管区に区分。現在の月寒中学校の敷地に配置された北部軍司令部は、北海道・東北・千島列島・樺太を統括する重要な役割を担っていた。

コレも見どころ

現在の月寒高校校庭で撮影された、歴史に残る一枚

第2展示室に額装で掲げられた一枚の写真。昭和11年(1936)に昭和天皇を迎えて実施された、第七師団と第八師団の対抗軍事演習(陸軍最後の大演習)の折の記念写真だ。昭和天皇を中心に、各皇族方、軍上層部、将校団が並び、数え切れぬほどの人数に息をのむ。この場所は現在の月寒高校のグラウンドで、背景に写る木造の建物は第25聯隊の兵営である。



昭和17年(1942)に着任した最後の軍司令官・樋口季一郎中将は、ナチスドイツの迫害を逃れてソ連領オトボルで立ち往生していた数万人^{きいちろう}のユダヤ人難民に満州通過を認め、逃避させたとされている。また昭和20年(1945)、終戦の日の翌々に占守島に突然侵入してきたソ連軍に対し、激闘の末にソ連軍を撤退させるなど、その後のソ連による北海道侵攻と分割の阻止に繋がった。展示されている樋口將軍の直筆の書や遺品類が、太平洋戦争末期の北海道の命運を物語る。

さらに月寒の歴史を記録した古文書や写真が並ぶ第3展示室や、大正昭和期の生活道具、定山溪鉄道関連資料が並ぶ第4展示室もあり、見学の際は時間に余裕を持って出かけたい。

※逃避させた人数については諸説あり。



北部軍の兵隊や将校たちが着用していた軍服や軍靴が並ぶ。



北部軍(第5方面軍)最後の司令官、樋口季一郎中将が愛用した外套とスーツケース。

住 所：豊平区月寒東2条2丁目3-9
電 話：011-854-6430
休 館 日：12～3月冬期休館、
4～11月の月・火・木・金・日曜
観 覧 時 間：10:00～16:00
ア ク セ ス：地下鉄東豊線「月寒中央」駅
1番出口から約900m
資料収蔵数：約4,000点
開 館 年：昭和60年(1985)



当時の住居を再現した部屋や、石臼を使ったひきうす体験コーナーなど工夫が随所に。

厚別川がもたらす豊かな恵みが、今日の礎に

清田区

きょうどかん

あしりべつ郷土館

地名の由来に歴史あり

平成9年、当時は札幌市内で最大の人口を有していた豊平区から分区して誕生した清田区。あしりべつ郷土館は、その長い歴史と先人の苦労を後世に伝え残そうと昭和58年(1983)に開館した。平成14年より清田区民センターに移転し、地域で使われていた農機具や生活道具をはじめ、写真や文献など、およそ1,800点以上の資料を展示・保存している。

館の名称でもある「あしりべつ」。昭和19年(1944)までこの地域は「厚別」と書いて「あしりべつ」と呼ばれており、その地名は

清田区のシンボルでもある厚別川に由来する。以前からこの場所に暮らしていたアイヌ民族の人々は、鮭を採る仕掛けの多い川を意味する「アシュシベツ」と呼び、明治以降に移住した人々によって、発音しやすい「アシリベツ」に変化したと考えられている。明治27年(1894)には函館本線が開通し、付近の駅名が「厚別」と記して「あつべつ」と呼ばれる。結果として川や地域が「あしりべつ」と「あつべつ」の二つの発音で読み書きされるようになったという。今も厚別区では厚別川をあつべつ川と読み、清田区ではあしりべつ川と読む背景やアイヌ語での意味なども、郷土館で詳しく解説されている。

コレも見どころ

読み応えのある「清田発掘」シリーズ

あしりべつ郷土館の運営にも学芸員的な立場で携わり、明治以降の清田区の歴史を30年以上研究している郷土史家の了寛紀明さん。北大図書館や道立図書館、道立文書館などに所蔵される文献や古地図、絵図や新聞記事などから丁寧に洗い出してきた清田区の歴史を「清田発掘」シリーズというレポート冊子にまとめている。60冊以上に及び冊子は館内で閲覧が可能だ。



公式HP
<https://ashiribetsu-museum.com/>

その「アシュシベツ」の地に明治6年(1873)に移住したのは、月寒開拓団の一員であった長岡重治である。現在の清田小学校あたりで最初に水田の試作を始め、それがのちに広がる稲作地帯の第一歩となる。

明治25年(1892)には北野・大谷地・月寒にかけて広大な農場を所有していた吉田善太郎ら地元の農家有志が協力して、厚別川から水を引く全長5kmに及ぶ素掘りの灌漑用水路(吉田用水)を開削。40~50人ほどの人員がスコップと鍬による手作業で約5ヵ月かけて掘ったものだ。これにより、清田・北野・大谷地にかけての一角が広大な水田地帯に変わっ

ていった。昭和40年代になると宅地化が進み、吉田用水は昭和45年(1970)に役目を終える。あしりべつ郷土館では、この吉田用水をはじめ清田区の歴史にまつわる動画を制作し、公式ホームページで公開するなど情報発信にも力を入れている。



公式ホームページには自主制作の動画もあり、実に分かりやすく清田区のあゆみを学べる。



稲作、畑作、林業の道具などが用途別に分類展示されている。

住 所: 清田区清田1条2丁目5-35
清田区民センター内
電 話: 011-885-0869
休 館 日: 月・火・木・金・日曜、祝日
年末年始、区民センター休館日
観 覧 時 間: 10:00~16:00
ア ク セ ス: 中央バス「清田小学校」停留所から約520m
資料収蔵数: 約1,800点
開 館 年: 昭和58年(1983)



建物は北海道遺産「開拓時代の洋風建築」のひとつにも選定されている。

開拓農家の暮らしを有形文化財の中で学ぶ

南区

みすまいきょうどしりょうかん

簾舞郷土資料館

札幌市に残る唯一の通行屋

簾舞郷土資料館は、札幌市指定有形文化財である「旧黒岩家住宅(旧簾舞通行屋)」内にある。

明治4年(1871)、札幌から定山溪を経て有珠に通じる本願寺道路が開通したことに伴い、その要所となる簾舞に宿泊・休憩所として翌5年に建てられたのが、簾舞通行屋だ。通行屋とは開拓使が主要道路の要所に設置した施設で、早馬の乗り継場所として、また旅行者などの宿泊所として利用され、交通事情が悪かった当時には大切な施設であった。

当初は多くの利用客がいたが、明治6年(1873)に千歳から室蘭へ札幌本道が完成した後は本願寺道路を通行する者が次第に減り、簾舞通行屋は明治17年(1884)に廃止。建物は通行屋屋守であった黒岩清五郎に払い下げられ、曳家で現在地に移された。その折に増築され、ほぼ現在の姿となった。開拓農家として黒岩家4代が暮らし、宿屋なども営んできたという。豊平町役場官吏の出張所、私設教育所(現在の簾舞小学校)などにも利用され、地域の発展に大きく寄与してきた。札幌市に残る唯一の通行屋であり、地区最古の開拓農家、さらに開拓使時代初期の家屋構造を今に伝える貴重な建物である。

コレも
見どころ

旧定山溪鉄道で使われた タブレット閉塞器

大正7年(1918)から昭和44年(1969)まで、札幌と定山溪の間を結んだ旧定山溪鉄道。単線路のため、追突や衝突を防止するための方法として「タブレット(通票)閉塞方式」が採用され、駅と駅の間など閉塞区間と呼ぶ一定区間で「タブレット」を所持している列車しか運行できないシステムだった。同館では道内最古と思われる貴重な2台一組のタブレット閉塞器を見ることができる。



明治5年(1872)の創建当時は現在の左半分(旧棟)のみの姿で、旧玄関の土間に続き板敷きの炉付き広間があり、中廊下を隔てて四つの部屋で構成する、宿泊機能を考慮した間取りになっている。広間には天井がなく、小屋裏のキングポスト・トラス(洋風小屋組)が見てとれる。洋風の建築技術を導入していた開拓使の意気込みが感じられる設計である。また明治20年(1887)に増築された右半分(新棟)は、馬小屋、納屋などが設けられており、開拓農家が生活しやすい間取りになっている。簾舞地区は札幌農学校第四農場、御料農場などの開設により、農林業を基幹産業としながら

発展していった。

新棟の資料館では地域の教育や文化、日常生活の変遷などをパネルや写真、実際に使われていた道具類などで紹介。また、旧定山溪鉄道の資料類も豊富で、鉄道好きにもたまらない展示品が並んでいる。



新棟の台所。人形や生活道具が当時の生活を想像させてくれる。



旧棟の天井を見上げると、キングポスト・トラスの構造がよく分かる。

- 住所：南区簾舞1条2丁目4-15
旧黒岩家住宅(旧簾舞通行屋)
- 電話：011-596-2825
- 休館日：月曜(祝日の場合は翌日)、
祝日の翌日、年末年始
- 観覧時間：9:00~16:00
- アクセス：じょうてつバス「旧簾舞通行屋前」から約150m、
または「東簾舞」停留所から約400m
- 資料収蔵数：約1,020点
- 開館年：昭和61年(1986)



展示を通して、定山溪が決して「温泉」だけではないことがよく分かる。

道内屈指の温泉地はこうして誕生した

南区

じょうざんけいきょうどはくぶつかん

定山溪郷土博物館

しゅげんじゃ 修験者が作った湯治場

札幌の奥座敷、定山溪温泉で知られる札幌市南区の定山溪。湯治場が作られた江戸末期からのあゆみを、ここ定山溪郷土博物館で学ぶことができる。無人の施設のため、見学の折はまず定山溪観光案内所または定山溪まちづくりセンターで鍵を借りた上で向かう。館内では歴史年表や解説パネルのほか、「生活」「温泉・観光」「林業・鉱業」「農業」など、テーマ別に分類された現物資料が展示されている。

安政5年(1858)、松浦武四郎が山道開削のために、虻田を経て豊平まで調査。一泊

した定山溪で温泉を発見したことが「後方羊蹄日誌」に記されている。この場所に温泉が湧いていることは、すでにアイヌ民族の人々にはよく知られていた。定山溪が本格的に温泉地としてあゆみ始めたのは、蝦夷地を巡っていた備前(現在の岡山県)生まれの修験者・美泉定山が、慶応2年(1866)にアイヌの若者の道案内で温泉と出合ったのが始まりである。定山はそこで温泉の効用を説きつつ暮らし、明治に入ると開拓使に道路と温泉場の建設を働きかけて運動。本願寺道路(現在の国道230号の基礎)ができると、時の開拓長官・東久世通禧がその功績にちなみ、この地を「定山溪」と命名した。

コレも見どころ

定山溪のあゆみを3分半の解説で学ぶ

郷土資料館の中心となる「クロニクル展示」は、松浦武四郎や美泉定山から始まる定山溪の歴史を、音声解説と共にパネルで学ぶことができる。音声ボタンを押すと、年代の移り変わりとともにスクリーン裏の資料がライトアップされる仕組みで、定山溪の成り立ちを3分30秒ほどで紹介してくれる。概要を学ぶことで展示資料への興味も一層深まるだろう。



定山が開いた温泉は「元湯」と呼ばれて受け継がれたが、明治時代の定山溪は交通の便も悪く、ひなびた湯治場であったという。その一方で鉱業や林業が発展し、労働者の流入に伴い市街地の人口も増加。交通の便の悪い定山溪～札幌間で、産出物や観光客を効率よく運ぶべく、鉄道の計画が持ち上がる。

大正7年(1918)、白石と定山溪をわずか1時間半で結ぶ定山溪鉄道が開通すると、一躍人気の観光地となった。大正12年(1923)には小樽新聞が募集した「北海道三景」に選ばれ、春は桜、秋は紅葉と観光客が急増。昭和4年(1929)には東札幌～定山溪間が電化され、所要時間も50分と大幅

に短縮された。

昭和44年(1969)に廃線を迎えるまで、定山溪の興隆に大きく貢献した定山溪鉄道。同館では駅名看板や運行区間表示プレート、切符など、ありし日の「定鉄」を伝える現物資料や貴重な写真を見ることができる。



今となっては懐かしい運行区間表示や電車プレートも。



定山溪鉄道の「小金湯」駅で使われていた駅名標。

住 所 南区定山溪温泉東4丁目308
定山溪小学校敷地内
電 話 011-598-2012(定山溪観光協会)
休 館 日 11～4月
観 覧 時 間 9:00～16:00
ア ク セ ス じょうてつバス「定山溪車庫前」
停留所から約350m
資料収蔵数 約1,000点
開 館 年 昭和57年(1982)

※令和7年に札幌市立義務教育学校定山溪学園の敷地(南区定山溪温泉西1丁目31番地)に移転予定



琴似二十四軒まちづくりセンターの2階。現在は水曜のみ開館している。

道内各地の屯田兵村は、琴似から始まった

西区

ことにとんでんれきしかん しりょうしつ

琴似屯田歴史館 資料室

適地として兵村第一号に

明治7年(1874)に発足した屯田兵制度をもとに開拓使は道内37カ所、札幌市内では4カ所の屯田兵村を開設。その中でも最初に誕生したのが琴似屯田兵村である。当時開拓使顧問であったホーレス・ケプロンの進言に従い、札幌本府から近く交通・通信の要衝であったこの地が選ばれた。移住したのは主に旧仙台藩士や旧会津藩士たちとその家族である。明治8年(1875)に208戸が移住し、さらに分村として発寒地区にも32戸が入り、計240戸をもって第一大隊第一中隊が編成された。その後の各地での兵村づくりに当たっては、琴似の経験が大いに活かされ、新設された兵村の指導者を数多く輩出している。

その琴似を“屯田兵村発祥の地”として、

古文書や図書、農機具など貴重な資料を収集・展示しているのが、この資料室だ。琴似神社境内に現存する「琴似屯田兵屋」(北海道指定有形文化財)と近接しているので、両方を巡ってみると一層理解も深まりそうだ。



建坪17.5坪、茅葺き土壁の兵屋が並ぶ琴似屯田兵村の様子。(写真所蔵／北海道大学附属図書館)

住 所：西区琴似2条7丁目1-10
西区役所分庁舎内
電 話：011-614-8245
休 館 日：月・火・木・金・土・日曜、祝日、お盆、年末年始
観 覧 時 間：10:00～16:00
ア ク セ ス：地下鉄東西線「琴似」駅1番出口から約350m
資料収蔵数：約2,000点
開 館 年：平成7年(1995)



片倉家の元家臣たちが乗船した「咸臨丸」「庚午丸」の精緻な模型も見どころ。

パネル解説と映像資料でじっくり学ぶ

白石区

しろいしきょうどかん

白石郷土館

郷里の城を離れ、新天地へ

平成28年に完成した白石区複合庁舎の1階。白石郷土館の入口で出迎えるのは、旧仙台藩の白石城(現在の宮城県白石市)初代当主、片倉小十郎景綱の甲冑(複製)だ。

仙台藩が戊辰戦争に敗れ領地を失った片倉家の元家臣たちは新政府の救済策で北海道札幌郡への移住を決意。明治4年(1871)、家族共々600余人が開拓使の船、「咸臨丸」「庚午丸」に分乗し北を目指した。第1船の「咸臨丸」は400人余を乗せ木古内沖で座礁し、移住団は大半の荷物を失うも、命からがらに脱出。第2船の「庚午丸」に合流して小樽港に到着した。苦難の末に380人が白石村となるモウチキサップ、少し遅れて241人が手稲村となるベッカウスへと住まいの地を定め、刀を斧や鋤に持ち替え宅地

や農地造りに励んだ。

同館では移住貫属団を束ねた取締役の佐藤孝郷の紹介、酪農や白石レンガの産業史など、白石村が札幌市と合併した昭和25年(1950)までの記録を、パネルによる展示などで紹介している。



鉄砲鍛冶を揃えて仙台藩の最強鉄砲隊を育てた片倉家の火縄銃(模型)。その砲術は現在「片倉鉄砲隊」として宮城県白石市で再興され、白石区にも承継されつつある。

住 所：白石区南郷通1丁目南8-1
白石区複合庁舎1階
電 話：011-861-2405(区総務企画課)
休 館 日：土・日曜(第2土・日曜は開館)、祝日、年末年始
観 覧 時 間：8:45～17:15
ア ク セ ス：地下鉄東西線「白石」駅直結
資料収蔵数：約70点
開 館 年：平成28年(2016)



農作業に欠かせない労働力であった農耕馬。背景画も当時の風景を想像させてくれる。

農馬具などの展示から先人たちの苦勞をしのぶ

豊平区

ふくずみかいたくきねんかん

福住開拓記念館

六軒村と呼ばれた場所

昭和46年(1971)に、豊平区福住地区の明治から昭和にかけての歴史を今に伝えるべく開館。当時の生活の様子を描いた版画70点のほか、馬車や農機具、明治～昭和の生活道具などを数多く展示している。

明治4年(1871)に岩手県盛岡から月寒に移住した44戸のうち、6戸が月寒川を挟んで東側の少し離れた場所にあったことから、この地区は通称「六軒村」と呼ばれた。当初は歩行も困難な密林地帯や、一部はススキが生い茂る湿原が広がっていたことから「茅野」とも呼ばれていたという。その後「つきさつにしどおり」とされ、昭和19年(1944)に「豊平町福住」と変更された。地名は明治26年(1893)からこの地にある福住寺にあやかっただとも、幸福が住むようにとの願いが込め

められたとも言われている。

館内では大正・昭和期の福住地区の民家の様子を再現したコーナーや、迫力ある農耕馬コーナーなどが見どころだ。



大正・昭和初期の福住地区の民家を再現。

住所：豊平区福住1条4丁目13-17

福住まちづくりセンター併設

電話：011-855-6615

休館日：土・日曜、祝日、年末年始

観覧時間：9:00～17:00

アクセス：地下鉄東豊線「福住」駅
3番出口から約1km

資料収蔵数：約830点

開館年：昭和46年(1971)



平岸児童会館に併設されているので、窓口に声をかけてから入館を。

小学生が描いた絵画から平岸のあゆみを学ぶ

豊平区

ひらぎしきょうどしりょうかん

平岸郷土史料館

リンゴの名産地として

明治4年(1871)、仙台藩・水沢伊達氏の家臣を中心に集まった200余人余が移住し、翌年に開村した平岸村(現在の豊平区平岸)。平岸郷土史料館では、昔の人々の生活用具や馬ソリ、時代の変遷を描いた小学生の絵画などを展示し、地域の歴史を伝えている。

環状通のリンゴ並木が象徴するように、平岸はかつてリンゴの一大産地であった。明治8年(1875)頃に開拓使本庁内にあった果樹園から配布された苗木で栽培が始まり、明治17年(1884)頃には多くの果樹園が誕生する。地域の特産品となった「平岸りんご」は本州のみならず上海やウラジオストクなど海外へも輸出されるほどの人気を誇っていた。資料館にはリンゴ農家が使用していた用具類も展示されており、平岸とリンゴの

あゆみを学ぶことができる。

また、平岸近郊で発見された縄文土器や石器も展示されている。土器や石器を眺めながら数千年前の人々の営みに思いを馳せてみるのもよい。



文様もくっきりと残る縄文土器片の数々。いずれも平岸近郊で出土したもの。

住所：豊平区平岸3条9丁目15 平岸児童会館内

電話：011-812-2493

休館日：日曜、祝日、年末年始

観覧時間：8:45～18:00

アクセス：地下鉄南北線「平岸」駅
3番出口から約600m

資料収蔵数：約440点

開館年：昭和57年(1982)